

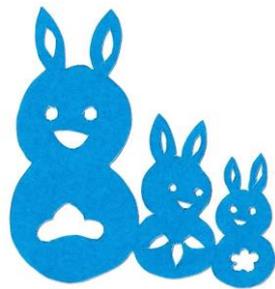
だいたく通信 第六十号 「冬の号」

ひあこちゃん

前号でも記しましたが、今年はいつまでも夏のような陽気が続き、秋らしい日がほとんどないまま急に寒くなってきました。暑いか寒いかしかなない、そんな気候に変わっていつてしまふのかと思うと、ちょっと寂しいですね。

社報「だいたく通信」は今号で第六十号を迎えました。これからもお宮に関心を持っていただけるような内容をお伝えしたいと思えます。引き続きなにとぞよろしくお願いいたします。

今回の内容は、新年のご祈禱受付時間のご案内、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。



新年のご祈禱受付時間

- 一月一日（水） 午前零時～午前一時
- 一月二日（木）・三日（金） 午前六時～午後五時
- 一月四日（土）～七日（初子・火） 午前九時～午後五時
- 午前九時～正午



令和7年の厄年一覧(数え年)

	前厄	本厄	後厄
男性の厄年	24歳 平成14年生 うま	25歳 平成13年生 み(へび)	26歳 平成12年生 たつ
	41歳 昭和60年生 うし	42歳 昭和59年生 ね(ねずみ)	43歳 昭和58年生 い(いのしし)
	60歳 昭和41年生 うま	61歳 昭和40年生 み(へび)	62歳 昭和39年生 たつ
女性の厄年	18歳 平成20年生 ね(ねずみ)	19歳 平成19年生 い(いのしし)	20歳 平成18年生 いぬ
	32歳 平成6年生 いぬ	33歳 平成5年生 とり	34歳 平成4年生 さる
	36歳 平成2年生 うま	37歳 平成元年生 昭和64年生 み(へび)	38歳 昭和63年生 たつ

※近年は女性 61歳の還暦も厄年とする場合もあります。

お宮あれこれへびの話

来年の干支は「乙巳(きのとみ)」で、巳年、つまりへびの年です。そこで、今回はへびという生き物についてお話ししましょう。

へびは奈良時代には「へみ」と呼ばれていました。「へみ」の語源としては、「身を経て進み行く意で、へみ(経身)の義」〔俗語考〕、「ハミ(蝮)の義」〔言元梯〕など諸説ある

ようです。また、「はむ(食む)」とも関係があったのではないかともされます。

一般に方言には古いことばが残っていて、古い時代のものの考え方を
知るヒントになることがあります。
へびをあらわす方言をみると、
ナガモノ、ナガムシなどがあります。
す。こういった表現は、へびという
名を直接に言わないようにする、一
種の忌みことばだと考えられます。
近畿地方から西ではクチナワという
呼び方もよく見られます。これも忌
みことばに由来するものでしょう。
クチナワは「朽ち縄」、または「口
縄」だとする語源説がありますが、
詳細は不明です。

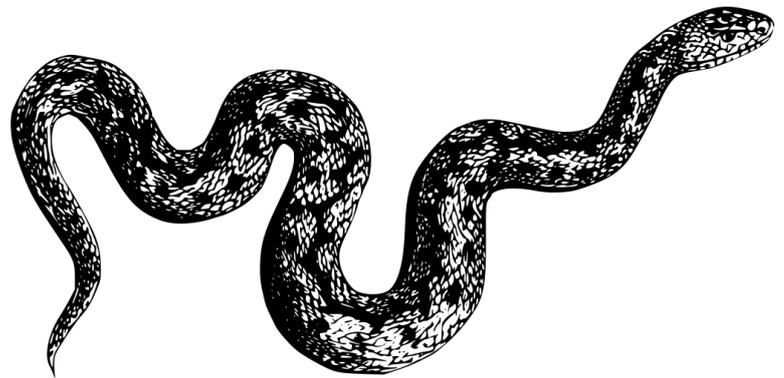
ちなみに、へみということばは、奈良時代の「仏足石歌」
にも次のようにあらわれています。

「四つの閑美(へみ)五つの鬼(もの)の集まれる穢(き
たな)き身をば厭(いと)ひ捨つべし 離れ捨つべし」

この歌では、人間の身体を不浄なものとして捉えており、「へ
み」が忌まれるべきものとされていたことがうかがわれます。

さて、へびは古代から山の神、水の神、あるいは雷神として
信仰されてきました。

古事記・日本書紀の神話にはへびが登場します。有名なもの
として、須佐之男命(スサノオノミコト)が八岐大蛇(ヤマタ



ノオロチ)を退治する物語があります。また、大国主神(オオ
クニヌシノカミ)が須勢理毘売(スセリビメ)に求婚して蛇
の室に入れられる話、神体が蛇である大物主神が人の娘に通っ
て正体が知られる話(三輪山伝説(みわやまでんせつ))な
どもよく知られています。

いろいろな地方の神事や雨乞いには、へびの姿をかたどった
ものを作って引き回す例が多くみられます。

たとえば、奈良県御所(ごせ)市の野口神社では、蛇祭
(じまつり)といって作り物のへびを引き回すのですが、
それぞれの家でへびにみそ汁をかけるため、汁掛祭(しるか
けまつり)とも呼んでいるそうです。

島根県出雲地方では、梅雨神(つゆがみ)といって梅雨期だ
けに岩の割れ目からへびが頭を出すとされています。これは田
植を始める時期を決めるためだと考えられます。

またへびを土蔵の守り神とする例も多くみられ、とくに白蛇
がよいとされます。

なお、白蛇は弁天様(べんてんさま)(弁才天)の使いと
もされ、鎌倉の円覚寺には、白へびがとぐろを巻いた上に弁天
様が座っている像があります。

へびについての昔話や伝説も全国各地に残っています。昔話
には、へびが人間の婿(むこ)あるい

は女房の姿となって結婚し、最後に幸福
に終わるという「蛇婿入り」「蛇女房」
などがあります。また、和歌山県の道成
寺縁起(どうじょうじえんぎ)として

知られる「安珍清姫(あんちんきよひ
め)」のように、人が執念のあげく蛇



体になるといふ伝説もあります。ヘビと人間の関りの深さを物語るものと言えるでしょう。

外国に目を向けてみますと、聖書に出てくる、ヘビがアダムとイブをそそのかして禁断の木の実を食べさせたという話があります。

ヘビに関する民間の信仰については、中世のヨーロッパ、アラビア、南アフリカのバントゥー系諸族などではヘビを縁起のいいものとされましたが、シレジア地方（ポーランド）では縁起が悪いものとしつつ不幸が起る前兆とも考え、ノルウェーでは不吉なものと考えられていたようです。また、海外でも水神、雨神、作物神としても崇拜されるところがあるようです。インド、ケララ州のドラビダ人の間では、雨と豊作をもたらすほか、生産力や生殖力をもつと信じられています。そのため不妊の女性が石像のヘビに祈ったり、コブラを神聖視して決して殺さず、コブラに捧（ささ）げるための牛乳を入れたコップを家の庭に置いておくといった習慣があるそうです。



ヘビが縁起の良いものとしても、良くないものとしても扱われるのは、ヘビの生態の特徴によるところが大きいようです。ヘビは冬は地中で冬眠し、春になると地面に姿をあらわして、脱皮によって成長します。こういったヘビの生態から、生命力復活の象徴として神聖視され、同時に生殖の神とも考えられたようです。一方、ヘビには足がなくてウロコがあるので、陸上

動物と魚類とどちらなのか分かりにくいところがあります。

また、住む場所も、地上だけでなく、地下、木の上、水辺とさまざまな場合によっては人間の住居にも出没します。こういった点でほかの動物と大きく異なっているところから、特別な力をもつ存在と考えられたのでしょう。

ヘビのもつ不思議な力にあやかって、大きく発展する年にしたいものです。

参考文献 「ジャパンナレッジ利用」 『日本国語大辞典』 『日本大百科全書』 『世界大百科事典』 『国史大辞典』

祭礼・祈禱などのご案内

○次回甲子祭

令和七年二月二十四日（月） 午前五時～正午

○開運千人講祈禱祭 毎月一日 午前六時～正午まで

○諸祈禱受付 商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈禱を行なっております。

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは次ページの電話番号もしくはメールにてお願いいたします。

不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話しく下さい。のちほどこちらからご連絡いたします。



(連載まんが)

大吉うさぎ

～神社しいとーい～

くまこまち 作



〈お問い合わせ・お申し込み〉

携帯

eメール

〇八〇〇一九八七〇八七二一六
daijokujinja@gmail.com

次号発行予定

「だいく通信第六十号」、いかがでしたか。次号「冬の号」は、令和七年四月二十五日甲子祭に発行予定です。

「だいく通信」第六十号 令和六年十二月二十六日発行
編集・発行 大國神社社務所

〒一七〇〇〇〇〇三 東京都豊島区駒込三二二一十一

<http://www.daijokujinja.org>

